

京極読書新聞 <第96号>

発行日 平成30年1月6日(土)
京極町生涯学習センター湧学館

平成29年度「後志の文学講座」

～小樽ゆかりの文学者ビッグスリー～ 『啄木・多喜二・整のよもやま話』

平成29年度の「後志の文学講座」第一回目では石川啄木を取り上げましたが、第二回目は12月8日に小林多喜二を、第三回目は12月22日に伊藤整を取り上げましたので、その概要を紹介いたします。

小林多喜二の回のテーマは「小林多喜二の恋と『東倶知安行』」でした。多喜二は大正13年3月に小樽高等商業学校(現小樽商科大学)を卒業し、4月に北海道拓殖銀行小樽支店に勤務しました。その年の10月に不幸な境遇にあった田口タキという女性を知ることになりました。タキを苦界から救い出した多喜二は結婚を考えていたようですが、結局はタキの遠慮もあって、結婚はかないませんでした。この回では多喜二からタキへの手紙を紹介したほか、二人の交際の様子や、結ばれなかった経緯などを、資料に基づいて説明いたしました。

もうひとつのテーマは多喜二の小説「東倶知安行」でしたが、京極の前身が東倶知安であることは皆さんご存じのことと思います。昭和3年2月に普通選挙法による最初の国会選挙が行われましたが、多喜二は労働農民党から立候補した山本懸蔵の選挙応援のために、実際に東倶知安に来たことがありました。その時のことを題材にして「東倶知安行」を書き上げたのです。講座では「東倶知安行」の内容のほか、作家としての活躍ぶりや、上京後の潜行活動の末、昭和8年2月に築地署で拷問を受け亡くなった多喜二の一生を紹介いたしました。

伊藤整の回のテーマは「整と小樽/整と多喜二」でした。整は明治38年に松前郡炭焼沢村に生まれ、明治40年に現在の小樽市塩谷に移ってきました。以来昭和3年上京して東京商科大学(現一橋大学)に通うまで小樽で過ごしました。整の書いた自伝的小説「若い詩人の肖像」は、幼い頃から学生時代や教員時代にかけての小樽での生活を著したものです。

この回では「若い詩人の肖像」をもとに小樽での整の暮らしぶりをお話しました。後半は小樽高等商業学校の一年上にいた小林多喜二との関わりについて紹介しました。整は多喜二自身や彼の文学への姿勢に強く関心を持ちました。また、自分にはない強い意志と行動力を妬ましく思うほどでした。それでも整は、多喜二の死の32年後に多喜二の文学碑を建立する際には、資金の不足を補うべく奔走しました。そんな多喜二に対する複雑な思いと、上京した後の作家活動について説明いたしました。

29年度の「後志の文学講座」は～小樽ゆかりの文学者ビッグスリー～ということで、3回にわたり実施いたしました。来年度も何か新しい企画ができればと考えております。



小林多喜二(1903-33)。小樽・若竹町の自宅にて、1929年

▼ 2ページ目へ続きます

特別講座紹介

11月と12月に各一回ずつ特別講座を開いたので、簡単に紹介します。

〈『平家物語』を読む会〉村山 功 一

◆「古文書解読—基礎の基礎」(11月17日実施)

古典作品をより楽しむために毛筆で書かれた古文書が読めるようにしたいものですが、これには専門知識と、長期にわたる修練・習得が必要です。今回はその第一歩として、行書体、草書体、連綿体で書かれた漢字、かな文字から楷書を想起するポイントを中心に学習しました。

講師に町役場に勤務する伊藤舞さんを招き、テキストは『伊勢物語』(学習院大学蔵・武蔵野書院刊影印本)〈図-1〉を用いて、第六話「芥川」の一部を解読しました(図-2)。



(図-1)



(図-2)

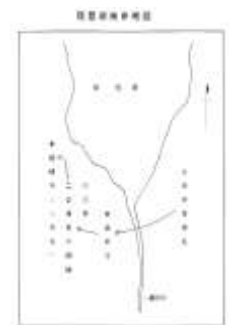
講座ではテキストの文字一つひとつについて、漢字の場合は楷書体を、ひらがなの場合はその由来(元となる漢字、いわゆる“万葉仮名”)を板書をしつつ説明。たとえば「むかしおとこありけり」と読む冒頭部は「武可之於登己安利介利」と書かれる万葉仮名の草書体であることなど、丁寧に解説してくれました。また、このテキストでは「カ」と読む仮名が「加」を崩した「か」ではなく「可」を崩したものであることや、「ケ」は「計」を崩した「け」ではなく「介」の崩しが用いられていることなどの説明もあり興味深い時間を過ごしました。

古文書を読むにはこうした“くずし字”の解読以外にも、たとえば書名の「伊勢物語」の「勢」は「勢」と書かれています。これが漢字の“異体字”と呼ばれるものですが、古文書類にはたくさんの異体字が含まれています。今回は時間の都合もありこの分野には触れなかったのですが、次の機会にはぜひ異体字の世界もどけたらと、思っています。

伊藤さんにはご多忙にもかかわらず講師を引受けられたうえに、たくさんの資料を準備していただきました。記してお礼と感謝を申し上げます。

◆「大津周辺を巡る旅」報告会(12月1日実施)

会員の小原さんが今年もまた貴重な史蹟を巡って来られましたので、その報告会をしました。写真を見ながら珍しいお話、楽しいエピソードを伺いおおいに盛り上がりました。その中から『平家』ゆかりの史蹟を紹介します。



(図-3)

◇沙沙貴神社



第59代宇多天皇を祀るこの神社の創建は古く、「延喜式神名帳」(927年完成)にすでにその名が記載されているという。のち、宇多天皇の皇子敦実親王を祖とする佐々木成頼がこの地を本拠地として以来“宇多源氏発祥の地”とされた。



その子孫に盛綱(巻十「藤戸」)、高綱(巻九「宇治川先陣」)兄弟がいる。盛綱の一族が京極氏の祖。京極の“原点”ともいえる神社である。



◇義仲寺



この地で最期を遂げた木曾義仲の墓所がある寺。境内には義仲の墓と並んで巴塚が立つ。そこからかなり離れて山門付近にひっそりとあるのが山吹塚。

山吹は巴と共に義仲に従って上洛した女性だが、程なく病を得て都に留まったと書かれているだけである（巻九「木曾最期」）。しかし山吹も巴同様、各地に多くの伝承を残している。

この塚はもと大津駅前にあったものを駅拡張工事の際（昭和48年）、ここに移したものだという。義仲と離ればなれとなって以来、実に八百年の時を経て義仲、巴と一緒になれたのである。殆ど自然石のようなこの塚は、山吹の身の上を暗示しているようで哀れを誘う。



後年、義仲を尊崇、敬慕した俳人松尾芭蕉は遺言によりここに葬られた。その墓も義仲の墓と並んで立っている。以来、義仲寺は俳人の聖地として、現在でも盛んに句会が開かれている。

◇逢坂の関所

京都から東海、東山、北陸道に通じる交通の要衝に設けられた古代の関所。関所としては795年に廃止されるが、都人にとっては旅愁や特別な思いを伴う地として歌枕とされた。

<これやこのゆくも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関>と百人一首にある蝉丸の歌は有名。（なお、蝉丸は巻十「海道下」にその名が見える。）現在の津市逢坂1～2丁目付近（写真の標識が立つ場所）にあったとされる



◇三井寺

正式には天台宗総本山園城寺（おんじょうじ）。同じ天台宗総本山を称する比叡山延暦寺を「山門」、対して園城寺をF寺門という。三井寺という別名は天智、天武、持統三人の天皇の産湯の水を汲んだ泉があることから【御井（みい）の寺】と呼ばれたことに由来するという。「平家」巻四「三井寺炎上」は、以仁王、源頼政の謀叛の際、逃亡する以仁王らを匿ったため、清盛の命を受けた重衡、忠度の軍勢に攻撃され焼亡したと描かれる。なお、重衡はその後奈良の興福寺との合戦で、興福寺、東大寺を焼くことになる。



これによって重衡は平家滅亡後“仏敵”として処刑される。

なお、同寺はその後も度々兵火により焼失、再建を繰り返し現在に至っている。



以上簡単ですが、小原さんの報告の中からほんの一部を紹介いたしました。帰省のたびに『平家』ゆかりの史蹟を巡り、その報告をしてくださる小原さんに感謝いたします。

1月6日(土)よりインターネットから『本の予約&取置き』ができるようになりました。



これまで、インターネットからの本の予約は「現在貸出中の本」のみの受付でしたが、1月6日より「現在利用可能(貸出されていない)な本」も新たに予約登録ができるようになりました。

予約受付をした本は、開館日の朝9:30時点でカウンターに取置きをします。連絡方法は電話またはメールを選択してください。取置き期間は連絡後1週間です。

図書館でゆっくり本を選ぶ時間がなくても希望の本をカウンターですぐに受け取れます。ぜひご利用ください。



ここから直接スマホ用の蔵書検索ページに行けます。

<https://ilisod001.aps.jp/lib-kyogoku.jp/>

※インターネット予約・取置きには利用者カードとパスワードが必要です。図書カウンターでお申し込みください。

発行

京極読書新聞 第97号は2月中旬頃発行予定です。

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700 (代表) FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
新着本情報などを随時お知らせしています。
<http://lib-kyogoku.jp>

